

円応寺初江王坐像再考

森田 龍磨 (成城大学)

神奈川・円応寺に伝来する初江王坐像は、宋風表現を用いた慶派仏師の作風を示す、鎌倉時代の十王像として評価を得ている像である。本像には銘文が確認され、建長3年(1251)の制作年、造像に関与した人物の名前などが判明することから、鎌倉地方彫刻の基準作例ともなっている。しかし造像背景や仏師については必ずしも十分に解明されてはおらず、造像時の状況は詳らかではない。本発表ではこうした問題意識に基づき、本像について以下の論点を中心に新解釈を提示したい。

(1) 尊像形式

本像は十王像の一体として考えられてきたが、真言宗系統の焰摩天曼荼羅に表される五道大神の図像に類似するため、当初は焰摩天曼荼羅を基に制作された五尊形式の像の一体であったと推定する。

(2) 本像の規範について

記録のみで現存はしないが、貞応2年(1223)に造営された醍醐寺焰魔堂には、快慶・湛慶によって制作された五尊形式の像が本尊として安置されていたことが知られ(『醍醐寺新要録』)、本像との関連を推定する。

(3) 当初の安置場所

醍醐寺焰魔堂には後壁画が描かれていたことが知られる。『日蓮聖人遺文全集』下所収、「良観等を破する御書」の一説に、醍醐寺焰魔堂の後壁画と同等のものが、「相州鎌倉の閻魔堂」にも存在したことを想起させる記述がある。この「相州鎌倉の閻魔堂」こそ、本像が建長3年に安置されていた堂宇であると推定する。

(4) 幸有について

本像の作者は、銘文に記される幸有を仏師とするのが定説となっているが、作風や衣文表現等の特色から、作者には鎌倉地方での活動も確認される肥後定慶の関与を想定した。同じく肥後定慶との関わりが指摘されている、寛喜元年(1229)制作の阿弥陀三尊像が伝来した熊本・明導寺には、「大工兼仏師 幸西」「小工 栄幸」というように、「幸」の字を用いる仏師の名が記された石塔が伝来している。このことから、幸有が肥後定慶と関わりのある仏師であると推定する。

(5) 善観房について

銘文に願主と記される善観房は、『徒然草』第227段「太秦の善観房と云ふ僧、節博士を定めて声明になせり」に記述される、「太秦の善観房」と同一人物である可能性を推定する。

(6) 造像背景

本像は、鎌倉幕府八代執権北条時宗の誕生に際して制作された像であると推定する。時宗は建長3年に鎌倉・甘縄に所在した有力御家人の安達氏の邸宅で誕生した。円応寺は、当初は見越岩という場所にあったといい、この見越岩は安達氏の所領内の甘縄周辺にあったとする説がある。この安達氏は醍醐寺と所縁の深い一族であること、また焰摩天は安産祈祷の本尊になっていることから、本像は建長3年に、時宗の誕生に際し、安達氏の存在を背景に造像された可能性を指摘する。

以上、これまでは十王像の一体として捉えられてきた本像を、焰摩天曼荼羅の一体という新視点を設定することにより、これまでの諸問題に対して新しい解釈を展開したい。